

第2章 武士の活躍と信仰



湯浅党と隅田党



時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
昭和(戦後)・平成時代	

湯浅党

湯浅党は、湯浅荘を本拠とし、血のつながりを中心とした武士集団です。その勢力は紀ノ川流域から紀南地方の一部まで拡大し、紀州最大の武士団に成長していきます。

1185（文治元）年に、湯浅宗重が鎌倉幕府の御家人となり、湯浅荘の地頭となって以来、宗重の子供や孫などが有田川流域の荘園の地頭となって根を張っていきます。湯浅荘の須原氏、広荘の広氏、石垣荘の得田氏、糸我荘の糸我氏、保田荘の保田氏、阿弓川荘の阿弓河氏などで、荘園名や村落名などを名字として名乗っていました。また宗重は、娘と有田郡田殿荘の崎山氏、海部郡木本荘の木本氏、有田郡藤並荘の藤並氏などとの結婚を通じて湯浅党を拡大させました。さらに紀ノ川流域の那賀郡田仲荘からは田仲氏を養子に迎えて湯浅党の一員としていました。

湯浅党は本家（惣領家）宗重の長男宗景の系統から石垣氏、阿弓河氏、伊都郡柿田荘の柿田氏や那賀郡貴志荘の貴志氏（保田氏の養子）など多くの氏族を生み出して勢力をほこっていたようです。遠隔地の湯浅党としては、牟婁郡芳養荘の芳養氏、本宮の本宮氏、名草郡の六十谷氏、勢多氏、伊都郡の相賀の生地氏などがありました。このうち芳養氏以外は湯浅党としては血のつながりがない氏族のようです。このように鎌倉期の終わりごろには、湯浅党は本拠の有田郡以外にも、広く血のつながりのない氏をも組み込んでいたことがわかります。

1221（承久3）年の承久の乱後、朝廷の監視や京都の警備と西日本の御家人統率のための役所である六波羅探題の北条氏との関係が深くなりました。北条氏は、後に紀伊国守護を兼ねましたので、湯浅党は両使という六波羅探題の命令を実際に紀伊国内で行使する重要な職務につきました。



湯浅景基 寄進状（施無畏寺蔵）

隅田党

伊都郡の隅田党は、1247（宝治元）年の宝治合戦後に、紀伊国守護が北条重時の系統に交代したときから北条氏の家来になったようです。隅田党は湯浅党と比べて規模も小さく有力な農業経営者である名主層とあまり変わらない存在でした。党としては、血のつながりよりも土地の結びつきを優先したような武士団でした。

隅田荘の荘園領主は京都の石清水八幡宮であり、守護の北条氏が地頭で隅田氏は地頭代についています。隅田荘には、荘園ができたころから隅田八幡神社が創建され、隅田党の精神的なよりどころとなっていました。

鎌倉時代、隅田党の本家は六波羅探題の北条氏に仕え、京都で六波羅検断方と呼ばれる警察業務の責任者として活躍しました。1332（元弘2）年、後醍醐天皇の倒幕計画に味方した河内国（大阪府）の楠木正成が隅田荘を攻めました。このことは隅田党が幕府方の武士団としてあなどりがたい存在だったからと言えます。1333年、鎌倉幕府が滅亡しますが、そのとき六波羅探題北条仲時らは鎌倉へ逃げようとし、隅田氏もこれに同行しました。しかし、近江国番場（滋賀県米原市）で後醍醐天皇方に包囲され、蓮花寺で全員が自害して、隅田党の本家は滅びました。

本家が滅亡した隅田党は、南北朝時代に構成員であった葛原氏や上田氏などを中心に再結成され、情勢に応じて南朝についたり北朝（室町幕府）についたりしていました。隅田党は南北朝の動乱を通じて紀伊国守護との結びつきが強くなり、室町時代には守護畠山氏の家来になりました。そして、畠山氏に従って、京都や伊勢国（三重県）などで活躍する者も出てきました。

室町時代の隅田党は、官省符荘の荘官であった高坊氏・亀岡氏・塙坂氏などといった政所一族を構成員に加え、名草郡和佐荘（和歌山市）にも進出しました。その勢力は、1512（永正9）年に、300名参加の能の上演会を利生護国寺（橋本市）で催すほどでした。このような隅田党も、検地や刀狩といった近世への動きの中で、ほとんどの者が農民となりましたが、一部は「地土」（郷土）として生活しました。



わかやまの知識



【佐藤氏と西行法師】

平安時代、那賀郡の田仲荘（紀の川市）に本拠をおく佐藤氏という武士の一族がいました。佐藤氏は、平将門をたおした藤原秀郷の流れをくみ、仲清・能清親子の代に平家の家来となって勢いを強めました。紀ノ川をはさんで南となりの、当時高野山の荘園であった荒川荘（紀の川市）に、兵をひきいれて乱暴をした事件は、よく知られています。

わが国を代表する歌人の1人である西行法師は、この佐藤氏の家に生まれました。もとの名を義清といい、仲清の兄にあたり、一度は家を継いでいたようです。兵衛尉に任命され、鳥羽上皇の身辺を守る北面の武士にも選ばれるなど、都の武士としての将来は約束されていましたが、1140（保延6）年、突然髪を切って僧となりました。同僚の武士の突然の死に、世の無常を感じたことが、原因とされています。

その後、京の東山や嵯峨野、伊勢などにすみ、高野山にも長く庵をかまえました。諸国をめぐる「遍歴の歌人」として、特に花や月などの自然をよんだ美しい和歌をたくさん残しました。『新古今和歌集』に多くの歌が選ばれています。代表的な歌集には『山家集』があります。